

生活協同組合パルシステム東京の皆さま、ご支援を賜りましてありがとうございます。

【事業名】「**貧困**」かつ**家庭環境が困難な状況**下に暮らす子どもたちの支援・育成事業

【背景】南アは「世界一の格差社会」と言われ、「貧困層」が人口の約6割を占めるなか、特に若い世代で失業率が50%を超えています。HIV／エイズ感染の問題も解決されておらず、国単位では世界最多710万人(総人口の約12%)の陽性者を抱え、大人の5人に一人が感染しています。こうした社会状況の影響を最も受けているのが、アパルトヘイト廃止後に生まれた若い世代や子どもたちです。

なかでも黒人人口が多く暮らす農村部貧困地域では、アパルトヘイト(人種隔離政策)時代に伝統的な農牧畜業が「破壊」され、収入を都市部や鉱山などへの出稼ぎに頼らざるを得ないなか、多くの家庭では、親の出稼ぎにより高齢者と子どもだけが残されています。また、エイズで親を亡くす「エイズ遺児」も後を絶ちません(南アにはエイズ遺児が約170万人いるとされ、世界のエイズ遺児の10人に一人が南アの子どもです)。

社会環境が厳しいなか、南ア農村部の貧困家庭の子どもたちは、身近な大人から必要なサポートが受けられず、食べものへのアクセスすら難しいのが現実です。その結果、十分な教育を受けられないまま、職に就くことができず、その中で将来への希望を失い、犯罪、暴力に巻き込まれ、レイプ、HIV感染など様々なリスクにさらされています。未来を担う子どもや若者がこのような状況にあることは、世代を超えて社会が悪循環する要因にもなっています。

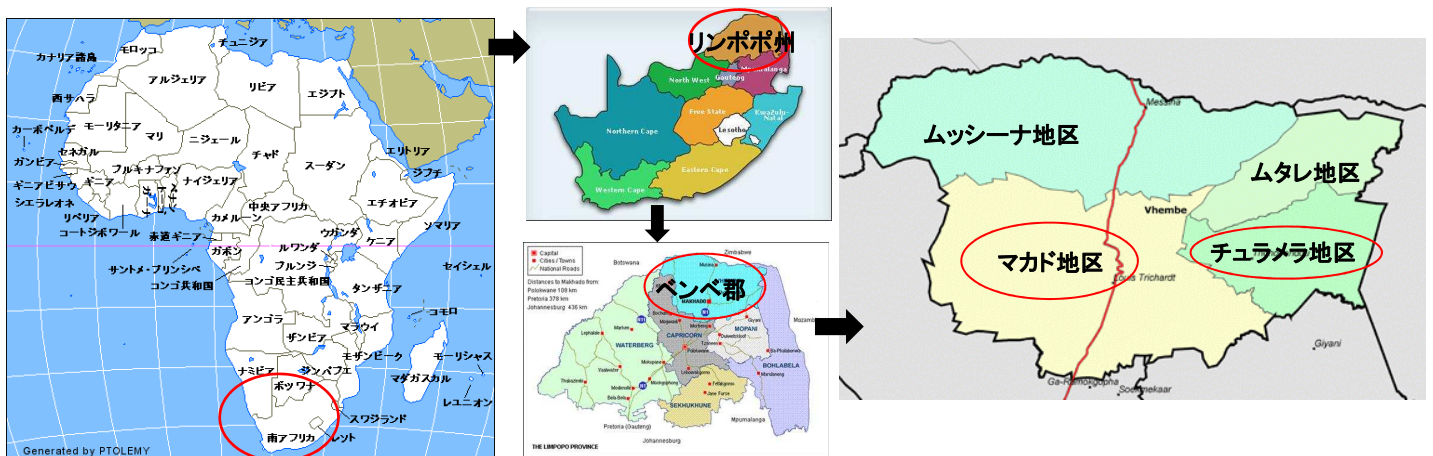
【事業の目的と活動概要】

以上の背景を受けて、南アでは、保護者の不在や貧困など、困難な家庭環境にある子どもたちが集まり支え合う場として、公的な制度に基づいてDICが設立されています。DICは、基本的には5～18歳の子どもたちが通いますが、困難な家庭環境ゆえ学校の進学が遅れ20代前半で高校に通う若者も対象となっています。DICは村の住民たち(多くが女性)が担う「ケアボランティア」によって運営され、子どもたちが学校帰りに立ち寄り、遊び、勉強しながら、社会の様々なことを学び、必要なカウンセリングを受けることなどが期待されています。しかし実際には、多くのケアボランティアが研修を受ける機会もなく、サポートに必要な知識やスキルを十分に持っていません。このため、DICはその役割を發揮できていない実態があります。

そこで本事業では、特に「貧困州」と位置づけられ、医療・教育レベルも他州より低いリンポポ州ベンベ郡において、2村のDICと協働して活動します。地域内で親がいない等の子どもが通う村内のDICによるケア・サポート体制を強化し、持続的なものにするとともに、DICに通う11～25歳の若者を対象としたリーダーシップ育成の活動(研修など)を実施し、彼ら・彼女らの内面や行動変容を目指すとともに、それを通じて自ら地域の啓発活動や生活改善を担う主体として、地域の若者のモデルとなり、波及効果を与えていける人材となるよう育成します。

具体的には、①DICのケアボランティアに対するケアに関する研修実施と地域関係者と協力しながらのOVCサポート体制づくり、②DICをOVCにとって魅力的な場とするためのプログラム研修、③OVCが自ら考え、選択し、行動できるように、特に10～20代の若者(以下、青少年)のエンパワメントの実施(リーダーシップ研修)、そして④お金をかけずに持続的に食べものを得られる菜園づくりです。以上の活動を通して、OVCを支えながら、彼ら・彼女らが希望をもてる社会をつくること、それが世代を超えて波及するような地域・社会・未来づくりを目的に活動を行います。

【活動地】南アフリカ共和国 リンポポ州ベンベ郡マカド地区およびチュラメラ地区
※主要都市ジョハネスバーグから北部へ約450km



| | |
|---------|--|
| 【パートナー】 | ムペゴ・ケアセンター(チュラメラ地区ムペゴ村)、ンタナノ・ケアセンター(マカド地区ムペニ村) |
| 【受益者】 | 【直接受益者】2村の子どもケアセンターのボランティア20名、2村の子どもケアセンターに通う子どもたち約260名(うち10～20代の青少年は、約60名) 【間接受益者】子どもの保護者・その他地域住民(両村合わせて3,000世帯)、地域の教員やソーシャルワーカー、村長、教会などの関係者 |

【活動報告】

2019年度は、「OVCが継続的に食べものを得る」という喫緊の課題に応えるため、また成果が目に見えやすいことから、菜園づくり研修から開始、注力しました。他には、ケアボランティアを対象とした、DICの日常的な活動をOVCにとって魅力的なものとするためのプログラム研修やケアに関する研修(社会心理研修)や、OVCの保護者/村の住民向けの研修(カウンセリング研修)、成果確認と課題の洗い出しのためのモニタリングを実施しました。

◆ 菜園づくり研修

DICの敷地ならびにケアボランティアの敷地で、身近な自然を利用して、お金をかけずに行う農法(自然農法)を用いて菜園づくり研修を実施しました。その結果、雨が降らない乾期でも、年間を通じて何等かの作物を栽培できるようになっています。2020年度からは、計画的に栽培することを学び、それにより、菜園から採れたもので、年間を通じてDICの給食を提供できるようになることを目指します(今はまだ地域の学校などからの寄付がないと難しい状況です)。



研修で水を有効活用するための畑のデザインと土の用意の仕方を学び、畝を作るところから開始したDICの菜園。播種の後、十分な水分が保たれるよう畝の表面を枯草で覆い、7月には少しずつ収穫ができるまでになりました。

ケアボランティアたちの自宅の菜園。シングルマザーも多く、安定的な収入がない中で、こうした家庭菜園が暮らしを助けてくれたとの声も。子どもケアセンターの活動を充実させるには、彼女たちの暮らしを支えることも重要です。



子どもケアセンターで提供される給食は、日々十分な食事を得ることが困難な子どもたちにとって、センターに通う動機付けにもなります。この日のメニューは主食のトウモロコシを練ったパップとトマトソース、キャベツとにんじんのソース、チキンでした。トウモロコシ粉とチキンは近くの学校が寄付してくれた食材を活用しました。

(右)JVCの現地スタッフによる研修。ケアボランティアには農業の経験がありません。今後も厳しい環境下でも身近な自然を使って農業を継続していけるよう、技術の定着を図るため、研修とモニタリング、フォローアップが必要とされています。

◆ カウンセリング研修(ケアボランティア以外に地域住民・保護者も参加)



自分自身の子どもの時代を振り返りながら、何が嬉しかったか何がツラかったかを考え、今自分の目の前にいる子どもにどのように接するべきかを考える、参加型の研修です。研修後に「子どもへの接し方が変わった」「自分のこういうところが悪かった」などの声が聞かれ、一人ひとりのレベルでは変化が生じ始めています。

◆ 社会心理研修(ケアボランティア対象)

日々の子どもたちとの関わりの中で抱えている課題などを参加者同士で共有した後、ケアを提供する人々の責任と役割や守秘義務など、DICの業務に関するトピックを学び、またストレスの低減方法や、身近な人の死を経験した子供たちのケアの方法など、DICの活動以外の日常生活でも役立つ実践的な内容もたくさん学ぶことができました。



ご支援誠にありがとうございます。引き続きよろしくお願いたします。